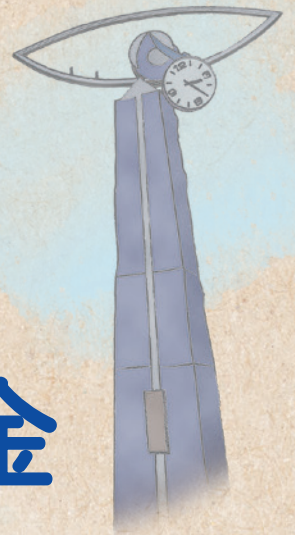
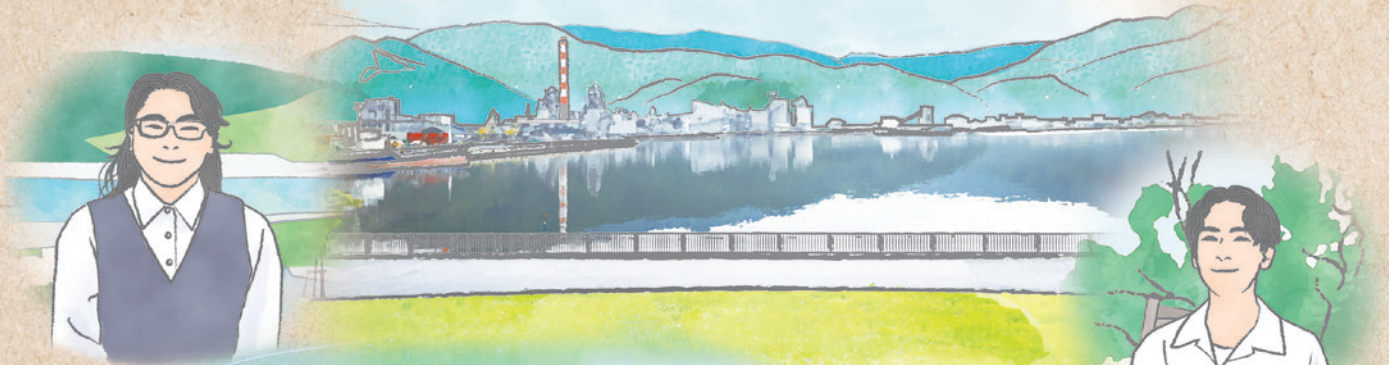




東日本大震災子ども支援募金



# ユネスコ協会 就学支援奨学金 レポート2023



公益社団法人  
日本ユネスコ協会連盟



## 震災から13年目を迎えて

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

会長 佐藤美樹



未曾有の被害をもたらした東日本大震災の発生から13年目を迎えました。ここに改めて震災により犠牲となられた方々に深く哀悼の意を表します。そしていまださまざまな課題に直面し、困難な生活を送られている方々に、心よりお見舞いを申し上げます。

日本ユネスコ協会連盟はUNESCO憲章の理念のもと、草の根運動の柱として、国内外における教育支援を行ってまいりました。東日本大震災後は、被災した子どもたちが、経済的な理由により夢や進学を諦めることのないよう、「ユネスコ協会就学支援奨学金」プログラムを立ち上げました。

本プログラムは2023年度に最後の新規奨学生を迎え、2025年度の事業完了まで支援を継続してまいります。ここに1年間の活動報告と、各地域から届いた奨学生、家族、元奨学生らのメッセージや日々の様子をご紹介します。これまでの13年間を通じて、約4000名の子どもたちが、夢や目標に向かい、勉学や部活動を継続することができました。ご協力くださいましたすべての皆さまに、心から御礼申し上げます。

年頭に発生した令和6年能登半島地震のように、近年では自然災害が増加傾向にあります。私たちは、東日本大震災における支援活動の経験を生かし、改めて、支援対象を全国に広げた「災害子ども教育支援」事業を2021年度に開始しました。この事業を通じ、今後も日本全国の被災地の子どもたちの未来を、教育で支える取り組みを続けてまいります。

当連盟の活動への一層のご理解をお願いするとともに、引き続き温かいご支援をよろしくお願い申し上げます。

## 2023年度実績

受給者数	奨学金給付額	2011年度からの 累計給付人数
503名	1億284万円	3977名

## 支援概要

対象者	給付額と期間	対象地域
地震・津波による家屋の損壊・流失や原発事故の影響による避難などの理由で経済状況が悪化した家庭の、高校進学を希望する中学3年生。	奨学生一人当たり月額2万円を3年間給付します。 (返還不要) <small>※中学3年次～高校2年次</small>	岩手、宮城、福島の3県で被害の大きかった市町村を特定して実施しています。

※震災により保護者を亡くした生徒を除きます。

## 東日本大震災子ども支援募金 ユネスコ協会就学支援奨学金レポート2023

ごあいさつ	01	奨学生と保護者からのお便り	09
活動概要	02	かつての奨学生からのお便り	11
奨学生レポート1	03	私たちが13年間で取り組んできたこと	12
奨学生レポート2	05	災害子ども教育支援	13
奨学生レポート3	07	会計報告／ご協力いただいた皆さま	14
かつての奨学生を訪ねて	08		

東日本大震災から13年が経ちました。被災地は日常を取り戻しつつあるものの、震災による影響で、いままざまな困難を抱える家庭は少なくありません。そんな中、ユネスコ協会就学支援奨学金は、子どもたちの学びと健やかな日常を継続して支えてきました。2023年度のレポート、まずは奨学生と元奨学生の姉妹にお話を伺いました。

## 勉強も部活も楽しい高校生活 二人それぞれに夢を描いて

千葉日和さん 高校1年生  
穂花さん 高校3年生

宮城県気仙沼市

### 大島で生まれ育った仲よし姉妹

気仙沼市の市街地から、震災後にできた全長297mの大橋を渡ると気仙沼大島です。この島で現在、大島公民館として活用されているのが、かつての大島中学校。2022年に閉校したとき、千葉日和さんは大島中の1年生、3年生だった姉の穂花さんは、最後の卒業生となりました。

「大島中は一学年10人足らず。だから学年問わず仲がよくて、皆が家族みたいでした」と穂花さん。中学だけでなく、大島全体でコミュニケーションがよくとれている、と母の美奈子さん(仮名)はいます。

「島の子どもたちは、普段から知らない人にも挨拶するし、震災のときには島民が一致団結して助け合いました。避難所となった大島中では、当時の中学生が、自主的に炊き出しやお年寄りのお世話などで走り回っていたのを覚えています」

そんな大島に生まれ育った穂花さんと日和さん。別々の高校に通ういまでも、子どもたちのため、一緒に大島公民館でジュニアリーダーとして活動しています。活動の内容は、子どもが集まるイベントのサポートや地域のイベントのお手伝いなど。

「小さい子どもたちと交流できるのが楽しい」と日和さん。



「いちばんの思い出は沖縄への修学旅行。観光地のほか戦跡では歴史を学ぶことができました」(穂花さん)



「地域社会研究の授業では、地域のためになるテーマを見つけたいです」(日和さん)

このほか、島の崎浜地区で続く美和太鼓にも姉妹で参加。やがて美奈子さんや父までハマってしまい、いまでは家族4人で美和太鼓を叩いているそうです。

### インドア派とアウトドア派

日和さんは高校1年生。弓道部で、いまは姿勢を整えるのに苦心しています。先輩たちの審査に通り、もう少しで実際に弓を引けるところまできたそうです。

「胴造りという基本の動作では、姿勢が曲がらないようにしないと全体のバランスが崩れます。そういうのが難しくて、面白いです」

また、紫式部の伝記を読むなど平安時代の文化に興味があるとか。古文や漢文を学ぶ言語文化という授業が面白いといいます。

一方、穂花さんは高校3年生。中学ではバスケ部、高校ではテニス部というスポーツ女子です。

「テニスは初めてでしたが、運動が好きだったので上達は早かったと思います。試合にも出られて3年間楽しかったです」

授業では、中学で苦手だった英語が、高校では好きになったとか。「先生の話がわかりやすく、細かいところまで説明してくださるので、ちょっと英語が得意になったかな」

インドア派の日和さんとアウトドア派の穂花さん。二人とも就学支援奨学金の奨学生で、穂花さんは既に受給を終えています。





「妹は二つ下というより双子の片割れのように」(穂花さん)

「お姉ちゃんは同じ話題で盛り上げられる友だちみたい」(日和さん)

「部活の道具や遠征費、入学時に必要な制服やカバン、運動着など、高校ではお金がかかることが多く、奨学金があって本当に助かりました」と美奈子さん。

## 震災の記憶を乗り越えて

父の職場は気仙沼市街の海のそばにあり、震災で跡形もなく流されました。父は職場の人たちと避難したものの、津波の水が一晩中ひかず、翌日ヘリコプターで救助されます。疲れ果ててようやく大島に戻れたのは5日後のことでした。港から歩いて家に帰り着くと、休む間もなく、島で発生していた山火事の消火に向かったそうです。

一方、震災のとき2歳の日和さんと家にいた美奈子さんは、激しい揺れがおさまると、4歳だった穂花さんを保育所に迎えに行き、そのまま家に連れて戻りました。

「うちは少し高いところがあるので、津波はここまでは来ないだろうと、そのときは思ったんです」

ところがその後、一緒に住む祖父が、隣のお婆さんを助けようとして、二人とも家の前で津波にのまれてしまったのです。その一部始終を美奈子さんたちは窓から見ていました。津波は家が揺れるほど周りで渦を巻き、美奈子さんたちはあわてて2階へ。幸い祖父は引き波に逆らって助かりましたが、隣のお婆さんは亡くなりました。その元気だった祖父は、3年前から何事にも

やる気をなくし、今年はずいに長年続けてきた米づくりをやめてしまったそうです。

「震災のときは皆、なんとかしなくてはと奮起していましたが、どこかでコトンと気持ちのスイッチが切れたのかも」と美奈子さん。それでも月日が経つにつれて、それぞれの胸に影を落とした記憶は、少しずつ乗り越えられてきたようだといいます。

## 二人の夢は広がっていく

将来、日和さんが目指しているのは、国語か社会の中学校の先生。部活動で生徒と交流できるのも楽しみだといいます。

「中学のとき憧れの先生がいて、ルールは守るけれど、生徒に寄り添ってくれる優しい先生でした。私もそんな先生になりたいです」

穂花さんが目指すのはウェディングプランナー。

「小さいころ七五三でお世話になったお店にウェディングドレスがいっぱい置いてあって、この仕事を知りました。ホテルのスタッフとして働きつつ、新郎新婦のいちばん近くで結婚式をサポートするホテルウェディングの仕事がしたいです」

大島でいちばん好きな場所を尋ねると、二人揃って「海」と答えてくれました。自宅から歩いて行ける小田の浜がお気に入りです。それぞれの道を歩み始めても、この海はいつまでも変わらず二人を見守ってくれるでしょう。

## 不登校の日々を乗り越えて やりたいことを見つけた

佐々木 蔣弥さん 高校2年生

宮城県気仙沼市

### 「高校生活は全然楽しい!」

毎朝学校に行き、授業を受けて、友だちとおしゃべりして、放課後には部活をして…。こんな学校での日常すべてが楽しいという佐々木蔣弥さん。BRT(バス)の駅から高校まで歩く途中でヘビやカモシカを見かけたり、好きな体育の授業ではドッチボールやバドミントンで汗を流したりと、高校生活を謳歌しています。高校入学を機に蔣弥さんが学校へ通い始めたのは、実に8年ぶりのことでした。小学校低学年から中学を卒業するまで不登校だったのです。

気仙沼港でカメラを構える蔣弥さん。「復興する気仙沼の街は写真で記録してきたし、これからも撮っていききたいです」



ずっと学校に行けなかった蔣弥さんが、高校に行こうと思った理由のひとつは、同じように不登校だった2つ上の兄が通っていたからでした。

「僕が入学したときお兄ちゃんは3年生。心強かったです。でも、通学するときは別々で、それぞれ友達と一緒に通っています」

これについては母の鈴華さん(仮名)が一言。

「自分がずっと一緒にいると蔣弥に友だちができなくなると、気を遣ったらしいです。わざと離れて歩くといっていました」

### 日常で気になる部分を写真に

「カメラを覗くと、日常の風景が面白く見えるときがある」と蔣弥さん。一緒に行動することの多い鈴華さんはいいます。「不意にカメラを出して撮り始めるので、『ここ』という感覚があるんでしょうね。私から見たら普通の街並みなんですけど。それと、口で話すのが苦手だから写真で表現したいんだろうな」

写真部に入るため、入学前に念願のカメラを買ってもらった蔣弥さん。ただ、シングルマザーの鈴華さんにとって、それはきつい出費でした。祖父の助けと、蔣弥さんに高校進学への意欲があるとわかって申請した就学支援奨学金のおかげだといいます。

「カメラ代をはじめ、部活で仙台まで撮影に行くといえば交通費がいるし、写真部って何かとお金がかかります。学校までのBRTの定期代も高いし。でも奨学金があるので『その日はお金がないから行かないで』といわずにすむ、その安心感があります」

### 声を出して泣いたことがない

震災直後、鈴華さんと3人の息子たちは中学校の体育館でしばらく過ごしました。そこは1000人くらいの避難者でぎゅうぎゅう詰めの状態。末っ子の蔣弥さんは3歳でした。避難者の中に妻を亡くした男性がいて、生まれたばかりの赤ちゃんを連れていたそうです。赤ちゃんはお母さんがいないからずっと泣いている。するとその男性は次第に様子がおかしくなり、周りにいた小さい子供たちが泣いても笑っても怒鳴るようになったといいます。

「蔣弥はそのころから声を出して泣いたことがないんです。涙は流れても声は出さない。このことが原因で萎縮したのではないかと。学校に行けなくなってから、カウンセリングの方にいわれました。蔣弥は何も覚えていませんが」と鈴華さん。

しかも、震災から1年後に蔣弥さんは内斜視と診断され、それまで目がよく見えていなかったとわかりました。メガネをかけて最初の言葉が「お母さんってこんな顔だったんだ」。見えない分、余計に耳からの情報に頼っていたと思われる。





「雲とか風景はずっと同じではないので、同じものが撮れないところが面白い」と蔣弥さん。  
いまはモノクロ写真に惹かれている。 撮影:佐々木蔣弥

本人には自覚のないストレスに加え、「自分と離れているとき、お母さんに何かあったらどうしよう」という不安から、蔣弥さんは鈴華さんから離れられなくなります。そして震災から5年が経ったところ、次第に学校に行けなくなったのです。次男も震災のショックから不登校となっており、鈴華さんは外で働くことを断念。内職で生活費を稼ぐほか、一時は生活保護を受けていたそうです。辛い状況でしたが、家賃のいらぬ仮設住宅に住めたことが救いだったといいます。

## 学校へは自分たちのタイミングで

蔣弥さんも次男も、震災によるPTSDと診断されました。周りからは不登校をやんわり非難する声も聞こえましたが、鈴華さんはいっさい「学校に行きなさい」とはいわなかったとか。「不登校でいるのが悪いことだと思ってほしくなかった。だから『学校には自分たちのタイミングで行ったらいいよ』と」

そのおかげで次男は「無理なく自分のタイミングで行けた」と、中学の卒業式の日にくれたそうです。

いまは保険会社の営業で忙しく飛び回る鈴華さんですが、震災後まったく余裕のないときから、3人の息子たちは一人ずつ就学支援奨学金を受給してきました(現在は蔣弥さんのみ受給)。

「返済不要の奨学金なので、本当に助かりましたし、ありがたいです。お金がないことで『あれもダメ、これもダメ』といわずにすみ、子どもたちはのびのび過ごせました」

長男は気仙沼市内でホテルマンとなり、高校を卒業した次男は、動物保護団体を立ち上げたいと動物看護の専門学校に通っています。蔣弥さんはまだ将来のことはわかりませんが、最近ようやく自分のことが話せるようになりました。

「学校で安心できるお友だちや先生ができたんだらうと思います。これから先、蔣弥には、なにごとでも人のせいにしない、自分で決められる人になってほしいです」

多くの人たちの支えで、蔣弥さんは写真という表現方法を見つけました。お母さんへの感謝を胸に、いまは毎日を生き生きと過ごしています。



## 高校では毎日が楽しい 大学進学も目指したい

小西敦友さん 高校2年生

岩手県大船渡市

「高校では行事も授業も10分休憩も全部楽しいです」

### 友だちや先生に恵まれて

高校ではいい友だちがいっぱいできたという小西敦友さん。「中学時代はパソコン部で、運動部の人たちと関わる機会が全然なかったんです。でも高校ではバレーとかバスケをやっている人とクラスで仲よしく。皆活発で、しゃべっていて楽しいです」

友だちだけでなく、授業でも面白い先生が多いそうです。「先生たちは生徒の問かけにきちんと答えてくださいます。2年から文系になりましたが、得意な科目は数学かな。高校卒業後は、大学で人文科学や心理学を学んでみたいです」

中学のとき、国語の先生が授業の最後に心理テストをしてくれていたとか。それが楽しかった思い出があり、心理学に興味が出てきたのかもしれません。兄は岩手の大学に進学。敦友さんも大学への希望に胸を膨らませています。

13年前の震災では、海のすぐ近くにあった家が津波で跡形もなく流されてしまいました。あと5年ほどで家のローンが終わる、という時期だったそうです。当時、敦友さんは3歳、兄は5歳、弟は生後1ヵ月足らずでした。

「避難所は人がいっぱい、プライベートが全然ないのがいちばんきつかったです」と父の直志さん(仮名)。辛い避難生活に耐え、数ヵ月後に仮設住宅へ入居。そして敦友さんが小学3年生のとき、再びローンを組んで高台に家建て、新しい生活が始まりました。とはいえ、2度目のローンで家計は楽ではないといいます。

「奨学金がないと子どもたちの教育はとて回りません。私たちの生活を助けてくれています」

そんな中でもやりくりして、敦友さんの大学進学のために貯金をしているという直志さん。

「敦友にはこのまま大人になってほしいです」

### 新しくなった大船渡の街で

敦友さんの弟はいま中学3年生。スポーツ好きで、公園で

よく一緒にボール遊びをするそうです。

「大船渡は公園がいっぱいあっていいです。とくに夢海公園は遊具もいろいろあってよく弟と遊びに行きます。いまは宿題が多くて、遊ぶのは休みの日くらいですけど」

住宅地が広がっていた海辺のエリアは震災後、広大な商業施設や公園に。震災前をほとんど知らない敦友さん姉弟にとっては、街がどんどん新しくなって楽しみが増えました。その一方で、交通が不便なため、通学も公園に行くにも友だちと会うときも、父か母に車で送ってもらっています。

「親がいないと自分一人では学校にも街にも行けません。お父さん、お母さんには感謝しかないです」

母には、挨拶などの礼儀も教わるという敦友さん。将来は人の役に立つ、頼られる人になりたいと話してくれました。

「海の周辺は復興してきましたが、交通が不便なのでバスの便をもっと増やしてほしいです」





# かつての奨学生を訪ねて

ユネスコ協会就学支援奨学金では、これまで数多くの子どもの学びを支えてきました。社会へと巣立った奨学生一人一人に、かけがえのない人生が続いています。今回は障がい者の入所施設で働く元奨学生を訪ねました。



## 障がいのある方々を支える毎日 辛いより楽しい方が優っている

山田智紀さん

福島県いわき市 社会福祉法人勤務  
奨学金受給期間 / 2014年～2016年

家資格を働きながら取得していきたいそうです。

### いつかはふるさとに戻って働きたい

山田さん一家の住まいはもともと福島県双葉郡富岡町でした。震災による福島第一原発の事故で、着の身着のまま母の実家があるいわき市に避難。山田さんは当時小学5年生で、それ以来、大学時代を除いていわきでの暮らしが続いています。

「富岡町の友だちとバラバラになったのがいちばん辛かったです。でも、新しい友だちや先生方に支えてもらい、自分と面識のない方々からも多くのご支援をいただき、助けられました」

山田さんは小学校から高校までずっと野球をやっていました。高校は2015年、双葉郡広野町にできた県立ふたば未来学園高校(現在は中高一貫校)に一期生として入学。もちろん野球部に入部しました。

「僕は双葉郡出身なので地元の高校に行きたかった。いろいろなことに挑戦できる高校で、部活も高校生活も楽しかったです」

奨学金は野球部の道具代や遠征費などのほか、大学のオープンキャンパスに行く旅費にもあてられたそうです。

原発事故後、一時は無人人となった富岡町。そこで数年前に小学校の先輩が理髪店を開いたと知って、山田さんは月に一回、髪を切りに通っています。

「行くたびに町に活気が出てきています。いつか震災前の富岡町に戻ってほしい。ゆくゆくは僕も富岡町に戻って働きたいです」

町でいちばん好きなのは、夜の森(よのもり)の桜並木。富岡町の自慢の場所だといいます。いま勤めている社会福祉法人は震災前、富岡町でも事業を展開。再び町に事業所ができればぜひ働きたいと、ふるさとへの思いを語ってくれました。



高校時代の山田さん。「いちばんの思い出は野球部の部活が楽しかったことです」

いまの奨学生へは「前向きな気持ちでいれば意外と何でもできる。何事にも挑戦してほしいです」

### 笑顔と「ありがとう」がやりがいに

いわき市内の施設で働く山田智紀さん。この仕事を選んだきっかけは、母が障がい児の施設で働いていたことだとか。

「家でよく仕事の話を楽しそうにしていたんです。それでボランティアをしてみたら、実際にとても楽しくて。大学では特別支援学校の教師を目指していたのですが、こちらの道を選びました」

山田さんが配属されたのは、障がいのある成人のための入所施設。知的障がいの方が多く、食事や入浴など日常生活のさまざまな場面で支援を行っています。

「障がいの程度がいろいろなので、利用者さんによって支援の仕方も変わってきます。また、自分の意思を表に出せない方もいらっしゃるの、意図を汲み取るのが難しいこともあります」

とはいえ、この職場で働いて3年目。時間をかけて少しずつ信頼関係を築けてこられたとも。夜勤もある大変な仕事ですが、「辛いことは、いまはないです。辛いより楽しいことの方が優っています。利用者さんが笑顔になったり『ありがとう』といわれたりすると『この仕事をやっているよかったです』と思います」

今後は、利用者の方からはもちろん、職員からも信頼されるような支援員を目指したい。そして、介護福祉士などの国

(福島県双葉郡大熊町)



(宮城県石巻市)

奨学金をいかして高校に通いながら夢をみつけられたらいいなと思います。中学卒業式の次の日からお金のアルバイトをして、お金の大切さを実感しました。母に初めての給料でサンダルをプレゼントしました。とても喜んでくれて嬉しかったです。学校生活は初めてのことでただ楽しいです。

## 2023年度生 (高校1年生)

将来の夢は具体的には決まっていますが、薬剤師の仕事に興味を持っています。今は6年制の薬学部への大学進学が目標です。この目標に向かって、高校では今まで以上に勉強を頑張っていきたいです。

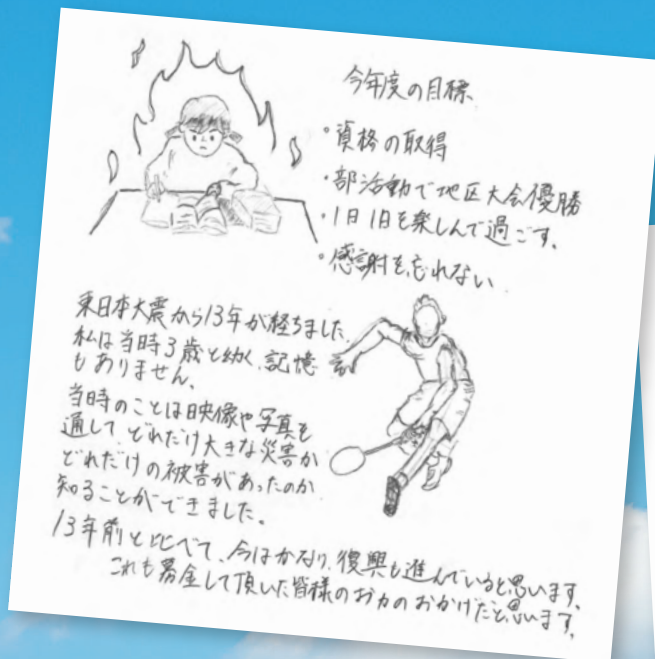
私は今、たくさんの人に支えられ、充実した生活を送ることができています。支えてくれている人たちへの恩を忘れず、自分もいつかたくさんの人役に立てるように、頑張っていきます。

(岩手県大船渡市)

## 奨学生と保護者

本奨学金の給付を受けた奨学生と保  
します。

(福島県双葉郡浪江町)



## 2022年度生 (高校2年生)

(岩手県釜石市)





(岩手県下閉伊郡山田町)

昨年は子ども食堂や地域のボランティア活動に参加し、地域の方々と沢山交流することができました。そこから色々なことを学び、より一層、地域のことを知り、とても有意義な時間を過ごすことができました。私は将来、保育士となり、地域の問題である、人手不足や少子高齢化の解決に少しでもつながるよう、お世話になった地元に貢献したいと考えています。目標達成に向け、勉強だけでなく、職業や地域社会の問題の解決を考えることにも力を入れたいです。震災から13年。風化させず、きちんと語り継いでいきたいです。

## 2021年度生 (高校3年生)

学校で必要になる文房具やYシャツ、靴下、お弁当のおかず、定期など、色々なものを買うことができました。今年から高3になり、進学のために勉強を引き続き頑張っていきたいです。

東日本大震災から13年が経ちました。

私は3歳でした。3歳でも鮮明にあの頃の記憶があります。近くの小学校に避難し、夜は寒く、よく眠れませんでした。自衛隊さんたちのお風呂、凄く気持ちよかったです。小さかった私に優しく話しかけてくれました。あの頃は現状をあまり理解できていなかった私でしたが、自衛隊さんをはじめ、周りの方々に沢山の元気と安心をもらっていました。皆さんの支えや助け合いがあり、今の生活が送れていることを忘れません。

残り1年の高校生活も充実させられるよう、頑張ります。

(宮城県石巻市)

私は高校卒業後、保育士を目指しています。目標に向け、残り1年の高校生活を頑張ります。私の高校では地域の震災からの復興を目指した活動が多くあります。高校2年間そのような活動を行い、高校生の自分ができよう復興に向けての取り組みやかかわり方をよく見つけることができました。復興への小さな自分の目標に向け、残り1年、頑張っていきたいと思います。

(岩手県上閉伊郡大槌町)

## からののお便り

護者から届いた感謝の声をご紹介します

## 保護者

(宮城県石巻市)

(岩手県大船渡市)

制服や通学カバン、教科書の他にも電子辞書やパソコンなども購入しなければならず、予想よりもはるかに高額な出費となりましたが、おかげさまで不足なく用意することができました。本当にありがとうございます。部活にも入りたいとのことですが、まだまだ思いがけない出費がありそうですが、奨学金の助けをかりて、充実した学校生活を送らせてあげたいです。金銭的な悩みが少なくなり、気持ちにも余裕をもって春を迎えられました。大変感謝しております。

ユネスコ協会就学支援奨学金に支援金を送っていただき、我々東日本大震災で被災した者たちが大変助かりました。個人的には、多くの家財等を失いました。当時小学生だった二人の娘は大学4年生と社会人3年目になりました。保育園児だった3番目の娘は、4月から高校3年生になりました。娘3人、お蔭さまでなんとか育てることができました。生活を元に戻すということがこんなにも大変であるということを知りました。皆さまからのあたたかい支援がなかったら、私たち家族は今、生きていくことができなかつたかもしれません。私も今できることをしております。兼業農家なので、子ども食堂への食材提供や、募金など。これも皆さまに教えていただいたことです。これからも可能な限り継続していきます。本当に、本当にありがとうございました。

# かつての奨学生からのお便り

中国から福島県大熊町に嫁いできた大竹英子さん。原発事故後、困難な暮らしの中、同町の中学校で日本語を学び直し、避難先の会津夜間高校に進学する際にユネスコ協会就学支援奨学金を受給しました。中学校では、歳の離れた同級生の模範となるなど、学習への意欲が高く、教育委員会からの推薦を受けて支援対象となりました。支援者の方々へ心からの感謝を綴ったお便りを紹介します。

大竹英子さん 学校聴講生

福島県双葉郡大熊町

私は32年前、日本人と結婚して中国から来日し、大熊町に住んでいます。今は「大熊町立学舎ゆめの森」で聴講生として学んでいます。

東日本大震災におき、福島原発事故が発生しました。翌日の朝、全町民が着の身着のまま避難しました。カオスで、ガソリンが尽きたため、車が動かなくなり、非常時にガソリンや水などほとんどないために火葬の列を行い、お寺にお骨を預けてもらいました。

日本で唯一頼りだ、夫がなくなり、残された目の不自由な義姉の面倒を見ることになりました。義姉を連れて避難先所を6回ほど転々とし、悲しくて不安だらけでどこに行っても大声で泣いてばかりでした。

車椅子に乗っていた義姉とホテルでベッドに2つに3ヶ月間寝ました。義姉はストレスがたまってお世話をすることが大変でした。さらに義姉が糖尿病で日に4回インスリンを打たなければなりません。ですから私が責任を持って打つことになりました。いっぺんに様々なことが重なり、精神的に生きることが限界でした。そんな時、全国の皆様から励ましのお手紙や支援物資を頂戴しました。お手紙を読んで心に栄養が入り、涙が流れました。すごく落ち込んでいた私は皆様の応援のおかげで



救われました。そして、生きる希望が生まれました。

もう一度勉強したい。勉強して感謝の手紙が書けるようになりたい。そんな思いから大熊町の教育委員会にお願いしました。その結果、小学校5年生と一緒に国語の授業を受けることになりました。その35歳、36歳年下の同級生と一緒に中学校を卒業することができました。その後は会津夜間高校を受験し、通うことになりました。昼は義姉の世話をしながら夜間高校に4年間通い続けることは中国出身の私にとって大変なことでした。寄付者の方々に感謝しながら精いっぱい勉強して頑張ることが出来ました。

私は日本に来て最初は「あいっお」から学びました。小さなことでも子供に聞いたり、教えてもらったりすることで元気をもらうことが出来ました。現在でも「学舎ゆめの森」で学び直しています。子供達に支えられ、助けられる毎日です。

これからは私も周りの人々に勇気を与えられたらいいなと思っています。そして、学ぶながら自分史を少しずつ書き続けていきたいです。

これからも引き続き勉強をして世の中に恩返しができるようにと思っています。

寄付者の方々、本当にありがとうございます。





# 私たちが13年間で取り組んできたこと

支援活動

1

## 学校への 緊急物資支援

2011年度

学校再開のためにまず行ったのが緊急物資支援でした。被災により学習備品等が流失した144校・2教育委員会に対し、各学校のニーズにあわせ、教材や体育用品などの支援物資を届けました。また、仮設住宅や避難所と、学校とをつなぐスクールバスも支援しました。



支援活動

2

## 文化・郷土芸能 への支援

2011～2013年

震災によって危機に瀕した東北の祭り・文化を救ってほしい。そんな被災地の声を受け、失われつつある日本の自然・文化を未来へ伝える「未来遺産運動」の一環として、人びとの気持ちをつなぐ郷土芸能や祭りへの物資支援を実施しました。



支援活動

3

## 心のケア 支援

2011～2015年度

地震と津波への恐怖から強い不安を抱いていた子どもたちの心理的ストレスをやわらげるために、夏休みにキャンプや絵画コンテストなどを実施しました。



支援活動

4

## 社会教育・ コミュニティ支援

2011～2018年度

仮設住宅での暮らしなど、被災地では生活環境が大きく変化しました。被災地のコミュニティ再生を目指して、コミュニティ図書館、学童保育所、移動図書館車、相撲場などを支援しました。



支援活動

5

## 奨学金支援 ユネスコ協会就学支援奨学金

2011年度～継続中

被災により経済状況が悪化した家庭の子どもたちが安心して高校に通えるよう、中学3年から返還不要の奨学金を3年間にわたって支援する活動を行っています。



支援活動

6

## 奨学金支援 MUFG・ユネスコ協会 東日本大震災復興育英基金

2011年度～継続中

両親もしくはいずれかの保護者が死亡・行方不明になってしまった子どもを対象とした、返還不要の奨学金を高校卒業まで支援しています。その他、TOMODACHI・MUFG国際交流プログラムなど、子どもたちの心豊かな成長を応援する支援も行いました。



支援活動

7

## アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム

2014年度～継続中

「1人の先生が学べば、100人の生徒が学べる。」東日本大震災をはじめ、全国の災害被災地の経験や教訓を学校の防災・減災につなげるために、学校への活動助成、教育研修会、活動報告会・減災教育フォーラムを実施しています。



支援活動

8

## 災害子ども 教育支援

2021年度～継続中

「東日本大震災子ども支援」の後継事業として、国内で大規模な自然災害が発生した際、災害の規模に応じて、教育現場や子どもたちの学びを支える支援を行っています。いつもどおりの学校生活、進学への道、将来の夢を守り、明るい未来につなげます。

※事業の詳細はP13をご覧ください。



東日本大震災を機に、2011年度に開始した「ユネスコ協会就学支援奨学金」は2025年度まで続く長期支援プログラムです。奨学生の新規採用は2023年度が最後となり、ご寄付の受付も2023年3月末をもって終了いたしました。

被災地の教育支援事業へのご寄付は、対象を日本全国に拡大した「災害子ども教育支援」で引き続きお受けしております。東日本大震災の経験を生かし、近年、全国で増加傾向にある大規模災害が発生した際に、被災地の教育支援を行います。

豪雨で浸水した園庭の土を入れ替えることができた秋田県の保育園からのお礼と写真



## いつか起こる災害から 子どもたちの未来を守るために。 災害子ども教育支援

日本のどこで、いつ起こるかわからない自然災害。とくに近年は激甚化・多様化・広域化しています。日本ユネスコ協会連盟は、これから起こる災害で学びを途切れさせず、子どもたちが夢や未来をあきらめることのないよう、「災害子ども教育支援」事業を2021年度にスタートさせました。災害の規模に応じ、右記3つのプログラムを柱として支援を行います。

※本事業における支援対象(災害規模・対象者・内容など)の詳細については、別途定めたガイドラインに基づき実施します。

①  
被災地の  
学校等に対する  
教育復興のための支援

②  
被災地の  
子どもたちに対する  
給付型の奨学金支援

③  
被災地の復興を支える  
ユース・ボランティア活動に  
対する支援

### 支援内容

## 大きな災害が起きても子どもたちの教育が守られる環境をつくるために、 引き続き皆さまの温かいご協力をお願いします。

※日本ユネスコ協会連盟へのご寄付は、寄付金控除などの対象になります。

### 郵便振替による募金

ゆうちょ銀行または郵便局からご寄付いただけます。

郵便振替 00190-4-84705

加入者名 公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

※通信欄に「災害子ども」とご記入ください。

※振込手数料はかかりません。

※領収書が必要な方は、大変お手数ですが、日本ユネスコ協会連盟までご連絡ください。

※同封の払込取扱票もご利用ください。

### 毎月の継続的な定額募金『月1・いいことプログラム』

#### ■クレジットカードの場合

ホームページから直接お申込みいただけます。

月1いいこと

検索

<https://unesco.or.jp>



#### ■口座振替の場合

口座振替申込書をお送りします。ご希望の方は当連盟までご連絡をお願いいたします。

### インターネットからの募金

ホームページからクレジット決済による募金をお申込みいただけます。

ユネスコ 募金

検索

<https://unesco.or.jp>



### 遺贈

遺言によりご自身の財産を贈与(寄付)いただく方法です。不動産の遺贈や相続財産の寄付などのご相談もお受けしています。ご希望の方には手続き方法などを掲載した資料をお送りしますので、当連盟までご連絡をお願いいたします。

### お問い合わせ

〒150-0013

東京都渋谷区恵比寿1-3-1 朝日生命恵比寿ビル12階

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

TEL: 03-5424-1121 (9:30~17:30/土・日・祝日を除く)

FAX: 03-5424-1126

メール: [nfuaj@unesco.or.jp](mailto:nfuaj@unesco.or.jp) (代表)

[kodomo@unesco.or.jp](mailto:kodomo@unesco.or.jp) (災害子ども教育支援担当)



会計報告

東日本大震災子ども支援

(2023年4月1日～2024年3月31日)

ユネスコ協会就学支援奨学金	
項目	金額 (単位:円)
前期繰越	291,100,935
寄付額	17,720,974
支出額	130,228,055
① 奨学金	121,080,000
② 事業経費	9,148,055
次期繰越	178,593,854

※ユネスコ協会就学支援奨学金は、原則として、奨学生1人につき3年間にわたって支援します。  
 ※次期繰越金は、2022年度に採用した奨学生の3年目分の給付に係る事業費用および2023年度に採用した奨学生の2～3年目分の給付に係る事業費用などを含む2024年度以降の本奨学金事業に使用されます。

子どもたちの学びを支えてくださった皆さま

ユネスコ協会就学支援奨学金は、2011年度よりこれまで、企業・団体をはじめとする多くの皆さまに支えられてきました。この場をお借りして、改めてお礼申し上げます。

2022年度末で募金の受付は原則終了しましたが、2023年度は以下の企業・団体の皆さまにご支援いただきました。

 <b>アクサ生命</b> アクサ生命保険株式会社	 <b>三菱UFJニコス</b> 三菱UFJニコス株式会社	 <b>ネット募金</b> LINEヤフー株式会社
--	--	--

※50音順

ご協力いただいた皆さま

個人募金者の皆さま

全国の個人募金者の方々から多くのご支援をいただきました。

企業・団体の皆さま

上記でご紹介しきれなかった企業・団体の皆さまからも、たくさんのご協力をいただきました。

子どもたちから子どもたちへ

幼稚園から大学まで、子どもたちや学生の皆さまからも、心のこもったご寄付が寄せられました。

会員の皆さま

ユネスコ協会・クラブのほか、維持会員、賛助団体会員、個人会員の皆さまからも、ユネスコ精神のもと温かいご協力をいただきました。

# 日本ユネスコ協会連盟の活動

私たちは「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と謳う国際連合教育科学文化機関(UNESCO)の理念に賛同し、全国に約270あるユネスコ協会・クラブとともに1947年から草の根で活動を続けるNGOです。

平和な世界の構築と持続可能な社会の推進をミッションに掲げ、国内外でさまざまな活動を展開しています。国連が提唱する持続可能な開発目標=SDGs(Sustainable Development Goals)のうち、とくに目標4「質の高い教育をみんなに」を重点ゴールに据え、達成に向けて以下のような事業に取り組んでいます。

※2023年度の活動については別冊「2023年度 活動レポート」をご覧ください。

いつか起こる災害から  
子どもたちの未来を守る  
災害子ども教育支援



学校における  
減災教育をサポート  
アクサ ユネスコ協会  
減災教育プログラム



学校との連携を通じた  
SDGs教育の充実  
SDGs達成に向けた  
次世代教育



子どもたちが  
夢と希望を抱ける社会へ  
U-Smile  
～みんなでつなぐ子ども応援プログラム



日本の文化や自然を守り伝え、  
持続可能な地域社会に貢献  
未来遺産運動



途上国での専門的な技術者の養成、  
子どもの文化学習を促進  
世界遺産活動



途上国の学びを支える  
さまざまな教育支援  
世界寺子屋運動



日本ユネスコ協会連盟ホームページ  
<https://www.unesco.or.jp>



公益社団法人  
日本ユネスコ協会連盟



私たちは持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。